

入学期における児童の小学校生活への適応に関する研究 (中間報告)

渡辺 良勝¹ 伊野 真司¹

小1プロブレムの解消や子どもの発達や学びの連続性を保障するために、幼児期の教育と小学校教育の連携や円滑な接続が求められている。本研究は入学期に焦点を当て、児童が小学校生活へ適応していくための具体的な手立てを検討した。2年計画の初年度の研究を通して、児童が幼児期に身に付けてきた力や経験の違い、思いや願いをいかしながら、入学期の教育活動を行うことが重要であるとわかった。

はじめに

近年、児童が小学校入学後に学校生活への不適応を起こす小1プロブレムの解消や、子どもの発達や学びの連続性を保障するために、幼児期の教育と小学校教育の連携や円滑な接続を図ることが求められている。そして、その際に重要なこととして、体系的な教育が組織的に行われることが挙げられている。

平成21年度から全面実施された幼稚園教育要領と平成23年度から全面実施された小学校学習指導要領においては、幼稚園と小学校が、幼小接続に関して相互に留意する旨が示されている。また、平成21年度から適用された保育所保育指針においても、小学校との積極的な連携を図るよう配慮することが示されている。

文部科学省においては、ほとんどの地方公共団体が幼小接続の重要性を認識しているものの、その取り組みは十分とはいえない状況であることから、円滑な接続に関する調査研究協力者会議が設置され、平成22年11月の「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)」(以下、「報告」という。)の中で、子どもの発達や学びの連続性を保障するために、幼小の円滑な接続の重要性が示された。

神奈川県では、小1プロブレムや幼小の円滑な接続等の教育課題に対して、平成19年度から公立幼稚園のある市町村を対象に、「小学校と就学前教育の連携の推進研究」を実施し、その課題解決に向けて取り組んでいる。研究を推進する中で、幼小の連携や円滑な接続を図る取組を継続する難しさや、私立の幼稚園や保育所と小学校との連携が不十分であることなどの課題が明らかになってきた。

総合教育センターでは、平成17年度に「幼・小、小・中の校種間連携の研究」に取り組んでおり、その中で、生活科を窓口とした幼小連携のカリキュラムを開発した。しかしその後、新しい幼稚園教育要領や小学校学

習指導要領を踏まえた研究は行っていない。そこで、幼稚園教育要領や学習指導要領の趣旨を踏まえた幼小連携・接続の在り方を探るために、本研究に取り組んだ。本稿は、平成24・25年度の2年間にわたる研究の初年度の取組みと成果をまとめた中間報告である。

研究の目的

入学期における児童が小学校生活に適応することは、友達や教師、上級生などと望ましい人間関係をつくる中で、児童が主体的に学習に取り組み、様々な力を身に付けながら成長していくための第一歩を踏み出すことだといえよう。そして児童自らが、小学校が自分たちの新しい生活の場であると、実感を伴って自覚した状態が適応だと考える。

本研究の目的は、幼児期の教育と、小学校生活のスタートである入学期における小学校教育の円滑な接続の在り方を探り、児童が小学校生活に適応できるようになるための具体的な手立てを見いだすことである。

研究の内容

1 研究テーマについて

(1) 「入学期」とは

前述の「報告」では、「幼児期と児童期の教育双方が接続を意識する期間を『接続期』というつながりとして捉えること」(文部科学省 2010)を提唱している。そして、その始期と終期の設定に関しては、各学校・施設がその実態を踏まえて設定すると示されている。お茶ノ水女子大学附属幼稚園・附属小学校や東京都品川区などにおける研究先進校の取組事例を参考にすると、概ね5歳児後半から第1学年の夏季休業前までを「接続期」と設定しているものが多い。

本研究では、「接続期」の意味を踏まえつつ、児童が入学後の小学校生活への適応に焦点を当てている点から、「入学期」という言葉を用いている。

そして、第1学年の新担任が決定する3月下旬か

1 教育課題研究課 指導主事

ら7月中旬頃（夏季休業前）までを「入学期」と設定した。3月下旬は入学前の時期ではあるが、新入学児童を迎える準備が始まる時期であり、第1学年の新担任が、入学する児童の発達や学びは幼児期からつながっていることを意識するという考え方から3月下旬頃を入学期の始期と設定した。

また、入学した児童がおおむね日課への見通しを持ち、合科的な学習から各教科等への学習の移行が可能となり、その基盤でもある学級の中での友達関係も落ち着いてくる7月中旬頃（夏季休業前）を終期と設定した。

(2) 「適応」とは

研究の目的で述べたとおり、本研究では、児童自らが主体的に小学校生活に適応できるようになるための具体的な手立てを見いだすことを目指している。ここでいう「適応」とは、新しい環境に慣れたりルールを理解したりして、小学校で生活できるようになるということだけではなく、望ましい人間関係を通して、小学校が自分たちの新しい生活の場であると、児童自らが実感を伴って自覚した状態である。

そのような状態になるためには、児童が安心できる環境の中で、幼児期の教育で身に付けてきた力を小学校生活の中で発揮し、「できた、わかった」という喜びを感じたり、友達や教師から認められる満足感を味わったりすることが必要である。そうすることにより児童は、「明日も学校に行きたい」という意欲を持つようになり、楽しく生き生きと小学校生活を送りながら徐々に成長することを通して適応していくと考える。

幼児期の教育の成果が小学校教育にいかされ、児童にこのような姿が見られたとき、幼児期の教育と小学校教育とが円滑に接続したと捉えることができる。

2 研究の流れ

ここで、2年間の研究計画の概要について述べる。

1年目は、まず国や県の幼小連携・接続の取組みの現状を把握・分析し、課題を整理した。

また、平塚市立港小学校（以下、「港小学校」という。）の協力を得て、入学期の児童の学校生活の様子、教師の指導の工夫や児童への関わり方等についての情報収集を目的として、第1学年担任への聞き取り調査及び授業参観を行った。

さらに、幼児期の教育の現状を把握することを目的として、文部科学省主催の協議会や神奈川県教育委員会主催の研修講座に参加し、幼小連携・接続を図る実践事例について情報収集するとともに、平塚市立港幼稚園（以下、「港幼稚園」という。）及び平塚市立須賀保育園（以下、「須賀保育園」という。）を対象とした参観等を行った。

そして、これらの取組みから得られた情報を基に、入学期における児童の小学校生活への適応に向けた具

体的な手立てとして、スタートカリキュラム（試案）を作成した。

2年目は、1年目に作成したスタートカリキュラム（試案）の考え方を踏まえて、入学期の児童の様子を観察するとともに、第1学年担任への聞き取り調査を行う。また、幼児期の教育の理解に向けて、公立・私立の幼稚園や保育所を訪問し、保育参観を通して遊びと学びのつながりをさらに見いだしたいと考えている。そして、試案の妥当性や有効性について分析し、スタートカリキュラムを完成させる。

3 研究1年目の取組み

(1) 幼小連携・接続に求められていること

ア 国の取組みの現状と課題

研究を進めるに当たり、近年における幼小連携・接続に関する経緯を整理した。（第1表）

平成16年の中央教育審議会幼児教育部会において、「学びの連続性を踏まえることの必要性」が示された。その後平成20年までに、中央教育審議会の答申が出されたり、教育基本法や学校教育法の改正や学習指導要領の改訂がなされたりする中で、幼児教育の充実や学校段階間の円滑な接続の実現に向けての考え方や方策等が示されてきた。

しかし、文部科学省が平成21年11月に行った調査では、「ほとんどの地方公共団体（都道府県教育委員会100%、市町村教育委員会99%）が幼小接続の重要性は認識」（文部科学省 2010）しているものの、その「取組は十分とはいえず、都道府県教育委員会の77%、市町村教育委員会の80%において幼小接続のための取組が行われていない」（文部科学省 2010）ということが、幼小接続の課題として挙げられた。

そして「報告」において、子どもの発達や学びの連続性を保障するために、幼・小の円滑な接続の重要性が改めて示された。

第1表 幼小連携・接続に関する経緯

年月	概要
H16・12	中央教育審議会幼児教育部会 ○幼児の生活の連続性及び発達や学びの連続性を踏まえて幼児教育を充実していくことの必要性が提言された。
H17・1	中央教育審議会答申 ○各学校段階において、その役割をしっかりと果たすことの重要性と学校段階間の円滑な接続に留意する必要があると示された。
H18・12	教育基本法の改正 ○各段階の学校において教育の目標が達成されるよう、教育を受ける者の心身の発達に応じた、体系的な教育を組織的に行うことが示された。 ○「幼児期の教育」は生涯における人格形成の基礎を培う重要なものであることが新たに規定された。

H 19 ・ 6	学校教育法の改正 ○幼稚園を、子どもが <u>最初に入学する学校</u> として初めて規定した。 ○幼稚園は <u>義務教育及びその後の教育の基礎を培うものであることを明確にした。</u>
H 20 ・ 1	中央教育審議会答申 ○小学校低学年では、 <u>幼児教育の成果を踏まえ、小学校生活への適応、教科等の学習への円滑な移行などが重要</u> であることが示された。 ○各教科等の内容や指導における配慮のみならず、生活面での指導や家庭との十分な連携・協力が必要であることが示された。
H 20 ・ 3	幼稚園教育要領の改訂 ○幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続のため、 <u>幼児と児童の交流の機会を設けたり、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会を設けたりする</u> など、連携を図るようにすることが示された。 小学校学習指導要領の改訂 ○学校がその目的を達成するために、 <u>幼稚園や保育所との連携や交流を図ることや、幼稚園教育の内容と生活科・音楽科・図画工作科の内容との関連を図る</u> ことが示された。
H 20 ・ 3	保育所保育指針の改定 ○子どもの生活や発達の連続性を踏まえ、保育の内容の工夫を図るとともに、就学に向けて、 <u>保育所の子どもと小学校の児童との交流、職員同士の交流、情報共有や相互理解など</u> 小学校と積極的な連携を図るように配慮することが示された。
H 22 ・ 11	幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告） ○ <u>子どもの発達や学びの連続性を保障するために、幼・小の円滑な接続の重要性</u> が示された。

※下線は、総合教育センター

また、幼小接続の取組みが十分に行われていない理由としては、次のようなことが挙げられている。

第2表 幼小接続の取組みが進まない理由

○接続関係を具体的にすることが難しい	……52%
○幼小の教育の違いについて十分理解・意識していない	……34%
○接続した教育課程の編成に積極的ではない	……23%

(文部科学省 2010)

この結果からは、幼小接続の具体的な手立てが見いだせていないことが伺える。また、幼小の教育の違いを反映した接続期のカリキュラム編成についても、課題があることがわかる。幼小接続の取組みを充実させるためには、幼児期の教育と小学校教育を双方の教職員が相互に理解することに加えて、具体的な手立てを示すことが不可欠である。

イ 神奈川県の実現と課題

前述のとおり、神奈川県では、小1プロブレムや幼小の円滑な接続等の教育課題に対して、平成19年度から公立幼稚園のある市町村を対象に、「小学校と就学前

教育の連携の推進研究」が実施されてきた。

平成19年度は、川崎市・横須賀市・南足柄市・箱根町の3市1町を推進研究指定地区とし、「職員間のつながり」、「子ども同士のつながり」、「地域や家庭を含めたつながり」、「指導方法や内容のつながり」の四つを観点として研究がスタートした。そして、就学前の教育と小学校教育とが相互に理解し合いながら円滑な接続をし、子どもの発達や学びの連続性を確保することを目指した。その後、平成22年度までに17市町村が推進指定を受け、「子どもの育ちを連続してとらえる」、「子どもの視点から考える」、「幼児期の教育と小学校教育のつながりを考える」ことの必要性を踏まえて研究に取り組んできた。その研究成果として、神奈川県教育委員会が、「まなびと学びをつなぐ 小学校と就学前教育の連携」というタイトルの下、平成21年3月に実践資料集を、平成23年3月に指導資料集を発行した。

研究を推進する中で、幼・小の教育の違いについて十分な相互理解がされていないことや、幼小連携・接続に向けた組織的な取組みを継続させる難しさなど、新たな課題も見えてきた。また県内には、公立幼稚園だけでなく公立保育所、私立の幼稚園・保育所から入学してくる児童が多い地域もあり、私立幼稚園や公・私立保育所と小学校との連携を図ることも課題として挙げられている。

こうした課題は他県でも見られる傾向であり、幼小の連携・接続を図るには、多様性に対応することも求められているといえる。

(2) 幼小連携・接続の実践事例から見えてくる課題

幼小連携・接続の具体的な手立てを見いだすために、文部科学省主催の「幼稚園教育理解推進事業（中央協議会）」で平成23・24年度に発表された、各都道府県の実践事例を参考に、その成果と課題を探った。

ア 保育参観・授業参観や交流会の取組みから

幼小連携が求められるようになり、幼小の教員同士の保育参観や授業参観、幼児と児童の交流会等が積極的に行われるようになった。

例えば、小学校の教師が幼稚園の保育参観を通して、幼児の活動への意欲を引き出すための環境整備や幼児が安心感を持つような接し方などを学んだり、幼児が遊ぶ様子から遊びと学びの意味の違いやつながりを考えたりすることが挙げられる。また、幼稚園の教師が1年生の授業参観を通して、児童の成長を捉えたり、小学校の学習や生活の基盤となる様々な体験を幼稚園でさせていることを実感したりすることなどがある。

幼児と児童の交流では、生活科で行われる秋祭りや昔遊び等の活動に5歳児を招待して一緒に遊んだり、1年生児童が5歳児に遊び方を教えたりするなどの交流会や、入学後に1年生と6年生の関係になる5歳児と5年生児童が、一緒に遊んだり給食を食べたりするなどの取組みがある。また、5歳児が小学校を訪れて

学習の様子を見たり、実際に座席に座って授業の雰囲気を感じたり、給食体験をしたりする等の取組みを始めている事例もある。

保育参観や授業参観をした教師からは、次のような感想があり、互いの教育を理解することに効果を上げていることがわかる。

- 互いの教育活動の様子を知ることができてよかった。
- 幼稚園では、幼児の思いを引き出すような環境づくりをしていることが参考になった。
- 卒園児の成長を見ることができてよかった。

また交流会の取組みは、幼児が小学校の様子を知ることによって入学に向けての不安が軽減され、小学校への親しみを持つことに効果を上げている。

しかし、その効果と小学校の教育活動とのつながりについては、次のような課題が示されている。

- 授業参観や交流会に向けての目的や実施後の成果と課題についての相互理解が不十分である。
- 体験したことが入学後の日常の教育活動に充分いかされていない。
- 担任や担当が変わると、取組みが継続されない場合があり取組みの成果が積み上げられていかない。

こうした課題を解決するためには、交流活動における幼児・児童それぞれの目標を明確にするとともに、活動内容と入学後の生活のどの場面がつながっていくのかを十分考えて実施するなどの改善を図る必要があるといえる。

イ 合同研究会・研修会での情報交換の取組みから

幼小の連携や接続を図るためには、互いの教育活動を理解し合うことが何よりも重要である。そうした点から、幼小の教員が合同研究会や合同研修会を行うことは、大変意味がある。

前述の「幼稚園教育理解推進事業（中央協議会）」においても、こうした取組みの実践報告は年々増加しており、幼小連携・接続に対する教師の意識が高まってきたとの評価を受けている。

合同研修会の事例としては、講師を招聘して効果的な幼小連携・接続の在り方についての講義を受けたり、1年生の教科書や児童の作品を見ることを通して、互いの教育や保育について考えたりすることなどがある。そしてそれらのことが、幼児や児童の見取り方や接し方について教師が学ぶ機会となっている。また、合同研究会の事例としては、研究授業を通して幼稚園と小学校双方の教師が互いの授業の雰囲気を感じ取ったり、幼児や児童の様子を知り指導方法について協議したりして、互いの教育実践について情報交換を行うことなどがある。

しかしこれらは、幼小互いの教育を理解するという点では効果を上げているが、理解したことを日常の教

育活動へ結び付けていく具体的な手立てが示された実践はほとんどない。

つまり、幼小の連携・接続を図ろうとするあまり、合同研修会や研究会を行うこと自体が目的化してしまい、得られた情報を互いの教育の充実に向けた取組みに活用するための具体的な手立てを見いだすことができていないのではないかと考える。

(3) 聞き取り調査と参観

ア 港小学校での聞き取り調査及び授業参観について

港小学校は、平成20年に「小学校と就学前教育の連携の推進研究」の指定を受け、幼小連携・接続の研究に取り組んだ実績のある小学校である。そして、隣接する港幼稚園と、生活科や学校行事において幼児と児童の交流を行ったり、職員間の交流として合同研修会・研究会等に取り組んだりしてきた。

平成24年度の第1学年は、児童数138名の4学級編成である。児童は、平塚市内の複数の公立・私立の幼稚園・保育園等から入学してきている。県内には、入学児童のほとんどがその学区の幼稚園から入学してくる、一校一園といった連携を図りやすい地域もあるが、複数の幼稚園や保育園等から入学してくる港小学校のような地域が増えてきている現状がある。本研究結果の普及を考えたとき、連携の基盤を持ちながらも、ある程度多様性のある港小学校は、聞き取り調査の対象として適切だと考えた。

今年度の聞き取り調査は、第3表に示した内容で、5月上旬・8月下旬・11月下旬の3回行った。

第3表 聞き取り調査の内容

[児童の学校生活の様子について]

- ・入学式から5月中旬頃までの教育活動の内容
- ・教育活動の中で、児童がスムーズに適応できたと思われる内容とその理由
- ・教育活動の中で、児童がスムーズに適応しにくかったと思われる内容とその理由

[教師の取組みについて]

- ・児童の小学校生活へのスムーズな適応に向けて、第1学年担任が工夫したことや課題と感じたこと
- ・児童の小学校生活へのスムーズな適応に向けて、学校全体で取り組んだこと
- ・幼稚園や保育所との引き継ぎで得られた情報で、入学期に役立った内容

また3回の聞き取り調査に加えて、授業参観も行った。授業参観を通して、児童の授業の様子やそれ以外の学校生活での様子を観察し、児童の発言や行動、表情などを捉え、そうした姿が見られるようになった原因を、入学期の活動の工夫や教師の関わり方から探り、児童の小学校生活への適応につながる具体的な手立てを見いだそうとした。

授業参観の時期と内容については、第4表に示したとおりである。

第4表 授業参観の内容

参観日	参観内容（組・教科名・単元名等）
平成24年 6月8日 (金)	1組：算数「かたちわけ」 2組：体育「マット遊び」 3組：国語「あいうえお」 4組：算数「ふえたりへったり」
平成24年 9月22日 (土)	運動会
平成24年 10月19日 (金)	音楽朝会・朝の会 1組 算数「3つのかずの計算」 3組 道徳「じぶんでできることは」 中休み
平成24年 10月22日 (月)	2組 生活「球根をそだてよう」 4組 体育「ドッジボール」 給食・清掃・帰りの会

イ 港幼稚園と須賀保育園を対象とした参観について
港幼稚園からは卒園児の半数以上が、須賀保育園からは卒園児の数名が港小学校への入学を予定している。

港幼稚園では、5歳児と4歳児の幼稚園での生活の様子と5歳児の給食体験の様子を、須賀保育園では、5歳児が行った港小学校での学校参観と給食体験の様子を参観した。参観の主な内容は第5表に、給食の献立は第6表に示したとおりである。

第5表 参観の主な内容

	月日（曜）	参観内容
港幼稚園	平成25年 1月22日 (火)	・登園の様子 ・朝の会 ・自ら選ぶ活動 ・1年生との交流（昔遊び） ・給食体験 ※給食体験は港小学校で実施。 それ以外は、港幼稚園で実施。
須賀保育園	平成25年 2月5日 (火)	・手遊びと読み聞かせ ・校舎内見学 ・外遊び（休み時間） ・1年生の授業参観 ・給食体験 ※すべて港小学校で実施。

第6表 給食の献立

港幼稚園	須賀保育園
ご飯	チキンハンバーガー
カレー	小松菜のシチュー
フルーツヨーグルト	チョコレートムース
牛乳	牛乳

※港小学校は自校給食

4 聞き取り調査と参観から見てきたこと

(1) 港小学校での聞き取り調査と授業参観より

6月に授業参観した際に、港小学校の1年生児童からは、小1プロブレムでいわれているような「授業中に落ち着いて話を聞くことができず、騒いだり、歩き回ったり、注意されると感情的になるなどして、集団

行動がとれず、学校生活に適應できない」といった姿は、ほとんど見受けられなかった。また、8月の聞き取り調査のときに担任からは、「今年の児童は全体的に落ち着いている」という印象とともに、「幼稚園や保育園ごとに生活の仕方や一日の流れなど様々な違いがあり、それをすり合わせるのに苦労したが、夏休みまでは全体的に落ち着いて学校生活を送ってきた」という感想を得た。児童の学校生活の様子と教師の取組みの具体的な内容は、第7表のとおりである。

第7表 聞き取り調査の具体的な内容

<p>[児童の学校生活の様子について]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・入学当初は緊張していたのか、全体的に静かだった。 ・4月の終わり頃から5月の連休明け頃に、はしゃぐようになってきた。 ・靴の履き替えや持ち物の準備や片付け、排泄等はおおむね身に付いていた。 ・平仮名や数等への関心・意欲は高かった。 ・自分ができていることを見てもらいたい欲求がある。 ・4月は、45分間持続できなかった。30分でトイレに行かせたり、活動を切り替えたりした。 ・入学当初は、同じ学級の友達よりも、違う学級の同じ幼稚園や保育園だった友達と遊んでいた。 ・幼稚園や保育園によって文字や数、音楽など経験の差があった。 ・幼稚園ごとに遊びのルールが違っていたことで、新しいルールづくりを話し合うことができた。 ・互いの名前を覚えるのに時間が掛かった。 ・文字は書けていても、書き順や字形を整える点は不十分である。 ・児童の願いと学習のねらいがずれると、学習意欲は低下した。
<p>[教師の取組みについて]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・できそうなことからやらせてみて、できないことは教師が教えた。 ・活動をパターン化することで、児童に活動への見通しを持たせることができ、安心感につながった。 ・児童一人ひとりと目を合わせながら話をしたり聞いたるようにした。 ・教師が遊びに加わることで、教師への親しみが高まるとともに、教師を仲立ちとして遊ぶ相手が広がった。 ・児童の気持ちを受け入れるようにソフトな言い方をしたり、想像豊かな児童の状況に応じてファンタジーやおまじないの要素を取り入れたりするなどの話し方を心掛けた。 ・いろいろな課題が出てきたときに、児童の実態に合わせて対応を考えてきた。 ・わからないことはマイナスではないという雰囲気づくりのために、「わからない」、「できない」と言えた児童を褒めた。 ・学習に向かう準備をまず行うように指導した。 ・学習でのつまずきに対しては、保護者と連絡を取り合って対応した。

今回聞き取った内容を、授業参観で見られた児童の姿と関連付けながら分析することにより、児童の小学校生活への適應に向けて必要なこととして、次のことが見えてきた。

まず、児童が小学校という新しい環境に積極的に関わろうとするには、児童が安心感を持てるような環境でなければならない。そのために教師は、「児童は、小学校生活で発揮できる力を、幼児期の教育で身に付けてきている」ということを理解し、その力を発揮できる場面を意図的に設定する必要がある。同じようなことは、1年生のみならずどの学年でも行われている。例えば、教師が授業を構想するときには、前学年までの既習内容を踏まえるということである。このことを1年生に当てはめて考えると、幼児期の教育で身に付けてきている力を把握することは当然のことである。「新入学児は小学校のことを知らないから、ほとんどのことができないのではないか」という先入観を持たないようにすべきである。

次に、経験や考え方・感じ方の違いがあることを、教師はもちろんのこと児童同士も理解し合い、その違いを互いに尊重し合えるような雰囲気づくりをすることが必要である。そのために教師は、まず児童の気持ちを受け止めることを心掛けるとともに、ときには見守り、ときには適切な助言をすることが求められる。そうした中で児童は、互いの考えを交流し合い、折り合いをつけながら、望ましい人間関係の中で新しい生活をつくっていきけるようになるであろう。

そして、児童の学習への期待や意欲を膨らませながら学習に取り組んでいけるようにすることが必要である。そのために教師は、児童が日常生活や幼稚園、保育所等での生活の中で培ってきた身の回りに起こる様々な出来事や遊びに対する「やってみたいな」という思いや「上手になりたいな」という願い、また「できない」、「わからない」といった不安を適切に見取らなければならない。そして、それらを十分に踏まえて学習環境を整えるとともに、意図的・計画的に学習内容を設定することが求められる。

つまり、幼小の円滑な接続を図り、児童が小学校生活に適応していくためには、小学校の教師が幼児期の教育について今まで以上に理解を深めるとともに、児童が「身に付けている力」、児童の「経験や考え方・感じ方の違い」、身の回りに起こる様々な出来事や遊びに対する児童の「思いや願い」という三つの視点で、児童の様子を「キャッチ」することが重要だということがわかった。

(2) 港幼稚園と須賀保育園の参観より

今回は、入学前の幼児（主に5歳児）の様子と教師の関わり方を知ることを目的として、港幼稚園・須賀保育園1回ずつ参観を行った。そして、幼児の様子については、小学校の聞き取り調査の分析から捉えた視点を基にして、幼児が「身に付けている力」、幼児の「経験の違い」、幼児の「思いや願い」の3点で整理した。内容は次のとおりである。

ア 幼児が「身に付けている力」について

港幼稚園の幼児は、園での毎日の活動を楽しみにしているようで、元気な声で挨拶しながら登園し、朝の会では笑顔で歌い、その後の自ら選ぶ活動の時間には友達と楽しそうにのびのびと遊んでいた。

須賀保育園の幼児は、学校図書館内にある畳コーナーでの読み聞かせの際、スムーズに上履きを脱ぎ、読み聞かせが始まると、話が終わるまで静かに座って聞くことができていた。また、外遊びの時間には、保育園とは形や大きさが異なることに影響されることなく、自分が興味を持った遊具で夢中になって遊ぶ姿が見られた。

港幼稚園と須賀保育園の参観を通じて、幼児の具体的な場面での様子として、次の点が挙げられる。

- ・朝の会では、椅子を自分で用意し、車座になって先生の話を聞くことができていた。
- ・靴の履き替え、トイレや手洗いなどは、全員が終わるまで少し時間がかかるが、自分でできていた。
- ・学校図書館の畳コーナーに上がるときに、脱いだ上履きを順番に揃えていた。
- ・読み聞かせは、体育座りの姿勢で集中して聞くことができていた（時間は約15分程度）。
- ・こまや積み木などを友達と一緒に使ったり、遊具を使う順番を守ったりすることができていた。
- ・自ら選ぶ活動で、ホールに設置したアスレチックコースに繰り返し挑戦していた。
- ・アスレチックコースに使ったマットや平均台、跳び箱などを、友達と協力して片付けていた。

イ 幼児の「経験の違い」について

給食体験では、配膳の説明をうなずきながら目を離さずに聞いている幼児の様子から、どちらの幼児も自分たちで配膳をやってみたいという思いを持っていることを感じた。献立は、幼児の好みや配膳のしやすさ等を配慮したものであった（第6表）。給食に要した時間は2園で多少の違いはあるものの、配膳は約15～20分、食べる時間は約25分、片付け（説明を含む）は約25分であった。

しかし、配膳時の補助人数や幼児が行った配膳の内容には違いが見られた。港幼稚園の給食体験では、幼児にとって初めての給食ということで、幼稚園・小学校併せて6名の教師・調理員等が配膳の補助をした。幼児は、盆に牛乳とストローを乗せて自分の席まで運び、カレー、ご飯、フルーツヨーグルトは、補助の教師が各幼児の席に運んだ。一方、須賀保育園では給食を実施しているため、保育園・小学校併せて4名の補助で配膳を行い、幼児は盆にメニューの全てを乗せてもらい、自分で席まで運んだ。

ウ 幼児の「思いや願い」について

港幼稚園の自ら選ぶ活動を参観している際、4、5人で積み木遊びをしていた幼児が、それぞれで作りた

いものがあり、使える積み木が足りなくなった場面があった。その際、以下のようなやりとりが見られた。

【C：幼児・T：教師】

C1：積み木が足りないんだよ。

C2：〇〇ちゃんも使いたいみたいだよ。

T：どうしたらいいかしら。

(幼児たちは、しばらく考えてから・・・)

C3：私の分を貸してあげる。

(C1は、なかなか納得できないでいる。教師はじつと幼児の様子を見つめている)

C1：ことりさん(4歳児クラス)のを借りよう。

(その後、みんなでことり組に行き、積み木を借りてきて遊びを始める)

この場面で教師は、「どうしたらいいかしら」という声掛けしかしていない。しかしこのことから、幼児の育ちへの見通しを持ちながら、幼児の思いを引き出だそうとすることと、幼児が解決策を考えるまで待つという教師の姿勢が見て取れる。一方幼児は、貸してあげることで折り合いを付けたたり、隣のクラスから借りるといった解決策を見いだしたりしている。このように幼児は、遊びの中で、何か問題が起きたときに、自分たちの力で解決しようとする経験を積んできていることがわかる。

こうしたことは、幼児の活動への意欲や主体的な活動を引き出すための環境条件を整える点にも通じている。例えば、港幼稚園では、幼児が自分のイメージを広げながら素材や用具を自ら選び、製作活動やごっこ遊びを楽しめるように、環境条件として紙製の筒やペットボトルのキャップなどの廃材や、学校ごっこで使えるランドセルや上履き入れなどの用具を教室内に用意していた。

ほかにも港幼稚園と須賀保育園の参観を通じて見取ることができた、幼児の活動への意欲、思いや願いを引き出す教師の接し方として、次の点が挙げられる。

- ・朝の会で、一日の予定を話すだけでなく、ミニホワイトボードに表示したものを使って、文字環境からも一日の見通しを持って生活する意識を高めていた。
- ・幼児に話すときは、教師はしゃがんで幼児と目の高さを合わせて話していた。
- ・港小学校の昇降口で幼児が靴を履き替える場面で、新しい場への不安や戸惑いがないよう、必要に応じて補助をしていた。
- ・港小学校で幼児がトイレや手洗い場を使用する場面で、自園のトイレとの違いが少ないことから、「やってきてごらん」と声を掛け、できた幼児には終わったあとに、「できたね」と笑顔で認め、小学校でも安心して行動できるように自信を持たせていた。

以上のように、小学校での聞き取り調査と参観から見えてきた三つの視点を、幼稚園、保育園で参観した内容に照らし合わせることで、入学期の学習活動をど

のように展開していけば良いのかということが明確になってきた。次に、これらの視点を踏まえて作成したスタートカリキュラム(試案)を示す。

5 スタートカリキュラム(試案)

(1) 入学期の三つの期間とそのねらい

本研究では、児童の小学校生活への適応に向けて、入学期を三つの期間に分けた。

第8表 入学期の三つの期間

期	期 間
第1期	3月下旬頃～4月中旬頃
第2期	4月中旬頃～5月中旬頃
第3期	5月中旬頃～7月中旬頃

その理由は、教師が各期間で特に意識したいことを明確にするためである。そうすることにより児童を見取るポイントや指導の在り方等が焦点化され、教師が見通しやゆとりを持って児童と接することができる考えたからである。以下に、各期間の学校の状況とそのねらい、教師が「キャッチ」したいことと具体的な手立てを示す。

ア 第1期：3月下旬頃～4月中旬頃

3月下旬頃は、新入学児にとっては、小学校入学に向けて期待と不安が入り混じった気持ちで過ごす時期であり、入学後もそうした状況が続くことが考えられる。教師にとっては、第1学年の新担任が決定し、入学に向けた様々な準備が始まる時期である。

第1期は、児童が小学校生活に対して抱いている不安を取り除き、安心感を持てるようにしたい。

そのために教師は、まず、児童が幼児期にどのような力を身に付けてきているのかを「キャッチ」する必要がある。情報収集の場としては、3月下旬頃に行われる幼稚園や保育所と小学校との引継ぎが考えられる。収集する内容は、例えば、衣服の着脱や食事、排泄、自分が使うものの準備や片付け等が身に付いているか、好きな遊びや歌にはどんなものがあるか、友達との関わり方はどんな様子なのかといったことが考えられる。そして、児童がそれらの力を入学後の新たな環境の中で発揮できるような活動を計画することが必要である。

例えば、小学校の机や椅子、靴箱やロッカー、トイレや水飲み場などは、幼稚園や保育所で使っていたものよりサイズが大きくなる。また教室や校舎等、空間的にも広くなる。しかし児童は、同じものではないにしろ、それらを全く使ったことがないわけではない。そこで教師は、児童一人ひとりの使う状況を見ながら、できたことを十分認めたり、気付いたことを受け止めたりするとともに、児童に体験させることを通して用具や場所の使い方を考えさせたい。また、児童からも幼稚園や保育所で歌っていた歌や手遊びなどの情報を得て、朝や帰りの会で歌ったり遊んだりすることも身に付けてきた力をいかすことになる。その際に教師は、

「不安を感じてはいないか」、「上手に使えるだろうか」、「困ったことはないか」など、児童一人ひとりの様子を丁寧に見取り、その状況に応じて児童一人ひとりへの具体的な手立てを見だし、それを日常の教育活動に反映させていく必要がある。

そうすることにより、幼小の段差を低くし、「小学校でも自分にはできることがある」と児童が実感し、小学校生活に対して安心感を持てるようになる。と考える。

イ 第2期：4月中旬頃～5月中旬頃

この時期は、健康診断や対面式、家庭訪問や避難訓練などの学校行事が続き、児童も教師も慌ただしさを感じる1か月である。

入学して2週間を過ぎた頃になると、児童は小学校生活の1日の流れをある程度わかるようになってくる。また、遊ぶ相手も同じ幼稚園や保育所の友達から、同じ学級の新しい友達へと変化してくるようになる。学級の友達と学校生活を送る中で児童は、例えば、休み時間や体育の時間に行う鬼遊びの遊び方やルール、給食や清掃の経験の有無など、自分と友達との経験や考え方・感じ方の違いに気付く。そうした違いは、ときとして児童同士のトラブルを生じさせるが、児童にとってはそれが新たな学びの機会となる。

第2期は、児童の経験や考え方・感じ方の違いをいかして、生活上の課題を自分たちの力で解決させながら、少しずつ新たな生活（ルール）を主体的につくっていきけるようにしたい。

そのために教師は、この違いの具体的な内容を、児童同士の関わり合いの様子や児童と教師との会話の中から「キャッチ」する必要がある。特に児童との会話に関しては、第1期で「先生は自分たちの話をよく聞いてくれる」という安心感を児童が持てるようになっていて、より多くの情報を引き出すことができるであろう。そして、トラブルや生活上の課題が生じたときの教師の役割は、児童の言い分を聞き、どうしたら解決できるだろうかと投げ掛け、児童に考えさせることを通して解決に導き、必要ならばそのことをきっかけに新たな生活（ルール）を児童と一緒につくっていくことである。この時期の慌ただしさを理由に、短時間で解決させたいあまり、教師の一方的な指導で解決してしまうと、児童が自分たちの力で新たな生活（ルール）をつくる機会を奪ってしまうことになる。

また、経験の有無の点から考えると、経験していないことや知らないことはマイナスではなく、むしろ成長できるチャンスだと教師が捉え、児童に理解させることも重要である。「違いがあるから考えられる」、「知らないことがあるから教え合える」という考え方を大切にして、児童が互いの違いを尊重し合いながら生活上の諸問題を解決し、自らの力で学校生活を楽しくすることができるような新たな考え方を見いだす経験をさせることが、適応に向けて必要なことだといえる。

ウ 第3期：5月中旬頃～7月中旬頃

第3期は、約2か月にわたる期間である。5月の中旬頃になると、学習は生活科中心の合科的なものから、各教科等が中心の学習に移行してくる。教科学習において、教科書やノート等を使った学習が展開され、児童が授業中に椅子に座っている時間も徐々に長くなると同時に、休み時間にトイレを済ませておくなど、小学校の日課に慣れてくるようになる。また、小学校生活での経験を通して、教師や上級生の力を借りずに、少しずつ自分たちの力で様々なことを行えるようになり、児童の中に自信が芽生えてくる。さらに学校によっては、遠足や運動会などの学校行事も行われ、児童にとっては日々の学校生活への期待感が膨らむ時期でもある。教師もそうした児童の変容を捉えることで、学級の実態をおおむね把握できるようになる。

第3期は、第1・2期の経験に加えて、児童の学習に対する思いや願いをいかして、国語の音読や算数のたし算やひき算、生活科での栽培活動や図工での製作活動など、児童が各教科学習の楽しさを味わいながら、主体的に学習に取り組めるようにしたい。

そのために教師は、児童のつぶやきや表情、しぐさ、教師との会話、活動の様子などから、児童の思いや願いがどのようなものに向いているのかを積極的に「キャッチ」する必要がある。児童は、学校だけでなく家庭や地域で、ものや人、場所や出来事などと関わりながら生活している。その中で児童は、例えば、「面白そうだな」、「やってみたいな」という思いや、「こんなことができるようになりたいな」、「もっと知りたいな」という願いを持つ。しかし、そうした思いや願いは、教科学習を意識したものというよりは、単純に興味・関心に基づいたものである。港幼稚園での自ら選ぶ活動において、アスレチックコースに繰り返し挑戦していた姿も、興味・関心に基づいたものであろう。幼児期の教育では、幼児が主体的に発達に必要な経験をすることができるように、環境条件を整えることが重視されている。それは、教師としての願いを持ちつつも、決して教師があらかじめ用意したねらいに沿った経験を幼児にさせるためではなく、幼児の中に興味・関心が湧いてきて、関わらずにはいられなくなり、自ら次の活動を展開していけるようにするためである。

児童が主体的に学習に取り組むようになるためには、学習指導要領に示されている内容だから扱うという考え方よりも、教師が積極的に捉えた児童の思いや願いを基に「この教材と出会ったら、きっと〇〇さんはこんな反応を示すだろうから、この学習ができそうだ」とか「こんな活動をしたら、きっと△△さんは、こんなことを言い出しそうだ」というように、自分の学級の児童一人ひとりの反応を思い浮かべ、児童が無意識のうちに、その思いや願いが学習指導要領に示されている内容と結び付くような教材との出会いを工夫し、

指導計画に適切に位置付ける必要がある。

ここに示した三つの期間は、はっきりと区別できるものではない。例えば、学校ごっこをしていた幼児の様子からは、「小学校で早く勉強したい」という願いが感じられる。このことから児童は、第1期から学習への興味・関心や意欲を持っていると考えられる。反対に、第3期に入っても、友達とコミュニケーションをとるのが苦手な児童もいるかもしれない。三つの期間をひとつの目安として、各期間で教師が意識することを明確にし、適切な指導をすることで、児童がスモールステップを踏みながら小学校生活に適応していけると考える。

(2) 具体的な場面を想定した活動案

ここからは、前項で述べた「入学期の三つの期間とねらい」を踏まえて、各期間における具体的な場面を想定した活動案の一部を提案する。(第9～11表)

ア 第1期：小学校生活に安心感を持つこと

入学式の翌日は、保護者と離れて登校する最初の日である。当然不安を持つ児童もいる。そこで入学式の日、児童が「明日も学校に行きたい」と思えるようにすることで、安心感を持たせる活動を考えた。

ここでは、入学式翌日の登校に対する不安を軽減し、学校生活に安心感を持たせる活動案を提案する。

第9表 活動案①

想定場面	第1期：入学式の翌日
教科等	生活科「がっこうだいすき」
児童が身に付けてきた力をいかす <input type="checkbox"/> 教科書の絵や文字、数などに、興味・関心を持つ力 <input type="checkbox"/> 自分が興味・関心を持った教科書を選ぶ力 <input type="checkbox"/> 同じ教科書を持ってきた友達を見付ける力 <input type="checkbox"/> 自己紹介をする力	
活動のねらい 自分が興味・関心を持った教科書と同じ教科書を選んだ友達探しを行い、グループ作りや自己紹介を通して、新しい仲間を知る。	
主な活動の流れ ①入学式当日に配付された教科書に家庭で名前を書いてもらいながら、全ての教科書を見て、その中から自分が興味・関心を持った一冊を選ぶ。 ②自分が選んだ教科書を、翌日持ってくる。 ③翌日、自分と同じ教科書を持ってきた友達探しを行い、グループを作る。 ④出来たグループごとで自己紹介をし合う。 (名前、出身の幼稚園・保育所、好きなことなど) ⑤各グループで教科書を見ながら会話を楽しむ。	
安心感を持った児童の姿 <input type="checkbox"/> 自分と同じ教科書を持ってきた友達を進んで探そうとしている。 <input type="checkbox"/> 初めての友達に対して自己紹介ができる。 <input type="checkbox"/> 教科書を見ながら、グループの友達と楽しそうに会話ができる。	

イ 第2期：新たな生活(ルール)をつくること

年度当初の給食に関しては、6年生が1年生の配膳

や片付けの補助に入ることが多い。しかし、始めからすべてを任せることを前提とせずに、1年生が互いの経験や考え方・感じ方の違いを共有し、そこから見いだした課題を考えることで、自分たちの給食という意識を持つことができる。

ここでは、できるだけ自分たちの力で給食の配膳から片付けまでを行えるようになるための活動案を提案する。

第10表 活動案②

想定場面	第2期：給食
教科等	学級活動
経験や考え方・感じ方の違いをいかす <input type="checkbox"/> 給食の経験の有無 <input type="checkbox"/> 自分が経験した配膳や片付けの方法 <input type="checkbox"/> 配膳や片付けで、自分たちができそうなことと不安なこと	
活動のねらい 入学前までの給食の経験の有無や違いを確かめ、自分たちで給食の配膳や片付けができ、楽しく給食を食べるための方法について考える。	
主な活動の流れ ①給食について、経験のある児童の話聞き、経験のない児童が給食へのイメージを持つ。 ②小学校の給食の流れについて知る。 ③経験したことを基に、配膳や片付けの中で、自分たちの力でできそうなことを考える。 ④配膳や片付けで不安なことや心配なことについて話し合い、教師や上級生に手伝って欲しいことを出し合う。 ⑤楽しく給食を食べるための方法を考える。	
新しい生活(ルール)づくりに向かう児童の姿 <input type="checkbox"/> 幼稚園や保育所での経験を話すことができる。 <input type="checkbox"/> 友達の話聞くことができる。 <input type="checkbox"/> こぼれないものや軽いものは一人で運ぶことができることに気付く。 <input type="checkbox"/> 熱いものや汁物をよそるときは手伝ってもらう必要があることに気付く。 <input type="checkbox"/> 順番を守って配膳したり片付けしたりするなどのルールを考えることができる。 <input type="checkbox"/> 班で食べたり、マナーを守ったりすることに気付く。	

ウ 第3期：学習に主体的に取り組むこと

遠足は、児童にとって楽しみな行事の一つである。遠足で楽しいことを体験し満足できたならば、児童は、そのことを会話や絵、文章など、自分が好きな表現方法を使って、家の人や友達、教師などに伝えたいと思うだろう。そうした児童の思いや願いを引き出すためには、遠足そのものを充実させることが必要である。そして、身近な人に楽しかったことを伝えたいという思いや、それを伝えるための表現方法を知りたいという願いをいかすことにより、児童にとって、国語科で話し方や聞き方を学ぶ必然性が生まれる。

ここでは、国語科の「話すこと・聞くこと」の活動案を提案する。

第11表 活動案③

想定場面	第3期：遠足で楽しかったことを身近な人に伝える
教科等	国語科「みんなにつたえよう」
思いや願いをいかす	○遠足で楽しかったことがあった ○そのことを家の人や友達に話したい ○上手に話すことができるかどうか不安
活動のねらい	知らせたいことを身近な人にわかりやすく伝えるために、話すときに必要な内容や丁寧な話し方を知り、話すことができる。 友達が伝えたいことをわかろうとして聞く。
主な活動の流れ	①遠足の様子を思い出し、楽しかったことを出し合う（ペアワーク）。 ②みんなに話すときに気を付けたいことについて話し合う（一斉学習）。 ③話すときに必要な内容や丁寧な話し方を知る。（いつ・どこで・楽しかったこと、～です・～ます） ④聞くときに大切なことを考える。（相手を見る・話の内容をわかろうとする） ⑤自分がみんなに伝えたいことを考える。 ⑥学習したことをいかして、話したり聞いたりする。
主体的に学習に取り組む児童の姿	○進んで自分の楽しかったことを話そうとしている。 ○話し方について、自分が知りたいことを言うことができる。 ○学んだことをいかして、自分の楽しかったことを話そうとしている。 ○友達の話聞いて、感じたことをつぶやいたり発言したりすることができる。

研究のまとめ

1 研究1年目の成果

聞き取り調査や参観を通して、児童が小学校生活に適応していくためには、児童の具体的な姿から、興味や関心、好奇心や探究心、葛藤や折り合いなど、心の動きを丁寧に「キャッチ」することが大切だということがわかった。そして、「安心感を持てるようにすること」、「違いをいかして、新たな生活（ルール）をつくっていくこと」、「主体的に学習に取り組めるようにすること」が必要だということもわかった。さらに、本研究で設定した「入学期」の各期間のねらいを整理できたことで、研究2年目に計画している、入学期の児童の様子を観察する視点が明確になった。

2 研究2年目に向けての課題

研究1年目は、4月から研究がスタートしたこともあり、入学当初の児童の様子を観察することができなかった。そこで研究2年目は、スタートカリキュラム（試案）を踏まえて、入学当初から児童の様子を観察し、本研究で設定した「入学期」の各期間とそのねら

い、そして具体的な場面での活動案の妥当性や有効性を分析していきたい。また、幼児期の教育への理解を更に深めるために、幼稚園や保育所を訪問し、幼児の活動している姿や教師の幼児への接し方等について情報収集をしたい。そのことを通して、児童の小学校生活への適応に向けた新たな具体的な手立てを探っていく、スタートカリキュラムを完成させたい。

おわりに

幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続を図るには、互いの教育を理解することが何よりも大切なことだといわれている。幼稚園・保育所等から小学校へと、学びの場は変わっても、そこで学び続ける子どもたちの成長は連続するものでなければならない。今後、幼保小連携・接続はますます注目されるであろう。一人でも多くの児童が楽しく生き生きと小学校生活を送ることにつながるよう本研究を充実させていきたい。

なお、研究を進めるに当たり、ご指導・ご助言を頂いた文部科学省の津金美智子教科調査官、ご協力頂いた港小学校・港幼稚園・須賀保育園の先生方に感謝の言葉を申し添えたい。

[聞き取り調査・参観を行った学校・幼稚園・保育所]
平塚市立港小学校
平塚市立港幼稚園
平塚市立須賀保育園
[助言者]
文部科学省 津金美智子

引用文献

文部科学省 2010 「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」 p.4、p.29 http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/11/22/1298955_1_1.pdf (URLは2013年3月取得)

参考文献

文部科学省 2008 「幼稚園教育要領解説」 フレーベル館
厚生労働省 2008 「保育所保育指針解説書」 フレーベル館
神奈川県教育委員会 2009 「まなびと学びをつなぐ 小学校と就学前教育の連携 実践資料集」
神奈川県教育委員会 2011 「まなびと学びをつなぐ 小学校と就学前教育の連携 指導資料集」
篠原孝子・田村学 2009 「こうすればうまくいく！ 幼稚園・保育所と小学校の連携のポイント」 ぎょうせい